
この一時を目に焼き付けて

時津風洋々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この一時を目に焼き付けて

【Nコード】

N8897Y

【作者名】

時津風洋々

【あらすじ】

西暦20XX年

人類の99%は死滅した

数少ない人類の生き残りは新たに地球上を支配する生物たちに翻弄されていく

僕はこうして生き残った

こんにちは

まずはこれを見てくれているであろう人に重要な事実を伝えなければならぬのかもしれない

どうしてこうなったのか

なぜこうなったのか

自分の胸に手を当てて考えてほしいと思う
きつとそれは我々、人類にとって大きな分岐点であったはずなのだから

少し回りくどいかもしれないが、まずは聞いてほしい

まずは例え話を始めるとしよう

君は物語の主人公だ

君はある日、生態系のトップから落ちたとしよう

よくあるSFモノのように地球外生命体が侵略してきたとか

ある種の動物が超進化してもいい

君がこの地球でぬくぬくと暮らしているのは人類がトップであるからだ

そこに、地位を脅かす存在が出てきたら君はどうする？

銃を手に取り戦う？

ハハハ…

そこだ

そこを間違えてしまったんだろうな

僕らはすぐに争いを選択してしまうっていう愚かな生き物なんだ

何も平和主義者や非暴力を訴えかける団体ってわけでもないんだ

そう…

これは仕方ないことなんだ

個人の思想がどうこうじゃなくて

人類って種が選択を間違えてしまったんだろうな

そんなことを考える冬の日

僕は数少ない

頂点を追われた人間の生き残りの一人になったんだ

さて

話を聞いてもらってなんだが

実際のところはあまりよく知らない

その理由については簡単だ

人類終末の日

僕は眠っていた

いや、眠らされていた

…らしい

どうにもおぼろげな記憶を辿っていくと
その日に僕はこの街を歩いていた

休日には数多くの人が賑わい

あまりの人の多さに眩暈をおこしそうになるくらいだ

僕はあまり人ごみってのは好きじゃない

出来れば家の中で一人でゆっくりと過ごしていたい人間だと思う

そんな僕がだ

そんな僕が…わざわざ好き好んでこの街にやってきたのにはある理由があつたと思う

さつきから自分の認識に自信が持てていない？

そりゃそうだ

僕は眠りから覚めたときに何もかもを失っていたんだから

友人のこと

家族のこと

いたかは定かではない恋人の事

記憶を失っていた

眠りから覚めたときに何もかも失っていた

なんだろうか

不思議と悲しみはない

そりゃそうか

悲しむべき対象との記憶がなくなっている

人間は相対的にしか自分の感情に確証が持てないものなのかな

ただ、自分という存在がごっそり持っていかれたような気がする
確かに今の状態を当たり前と思ってしまえば無駄な喪失感なんて
感じないのかもしれない

しかし、常識のすべてを失ったわけではない

何かが足りない

何かがおかしい

相対的な感情が僕には存在していることは否定できないだろう
そんな残り物のようなものでも、自分という存在のきっかけになる
んだっただけだと思っ

さて

これから話すことは僕たち人類に課せられた一つのテーマなんだろう
と思う

僕ごときが人類に対してあれこれと壮大な事を語るなんておこがましい
ものであるけれど

なんてことはない

すべて僕の目線での事実で

僕の目で見ただけを語るだけだ

これが今の世界だよ？

楽しいおはなし たのしくないお話 面白くないおはなし

外は寒い寒い

冬

僕は窓から見える街並みを見下ろしながら、簡素な椅子に腰をかけ温かいコーヒーを飲んでいた

生きている

そう何ら変わりがないように見えるこの街で僕は生きている

唯一の生存者として

「うへっ、にげえ…砂糖いれんの忘れた…」

角砂糖でいうところの二個相当を入れないと飲めないのである

僕はおもむろに砂糖を探す…

台所というにはあまりにもお粗末な簡易キッチンにある戸棚を手探りで。

本来であるならこの街は住むにはあまり適さない場所だ

もちろん古くから住んでいる人間もいただろうから、そういう人からしてみれば非難を受けるかもしれない

僕のおぼろげな記憶がそう語っている

全てを失ったわけじゃない

住めば都という言葉があるがまさにその通りだ
人がいなくなつたこの街でも僕はこうして生きていけている
飢えや急激な環境変化もなく
サバイバル生活を強いられる必要もない

そして何より孤独感すら皆無とっていい

それは少し違うな

孤独感はないわけじゃない

想像してほしい

『あなたは人類最後の生き残りです』
目が覚めたら突然言われたらどう感じる？

その絶望感に打ちひしがれるのだろうか？
それとも別の何かの感情？

人間は自分だけは死なないと思っている
大災害にあつた人
何らかの事件に巻き込まれた人

おそらく、自分が今日死ぬと思う人間はまずいないね

だけど、同時に自分が地球上で必ず生き残る最後の一人とも考えないだろ
そんなに自分に自信を持つてるやつってのはツチノコよりもお目にかかれない

案外に人間はそんな非現実的な状況に自分を重ね合わせられないもんだよ

もちろんSF小説や映画、漫画。…媒体はなんでもいいか

人間は絶対にありえない状況として自分を重ね合わせてみるんだからこそ楽しめるし娯楽として成立するんだよな

僕はいまだにこの非現実と自分の現実をうまく重ね合わせられないでいる

もちろん実感する場面がないわけでもないがどこか遠い出来事のように感じてしまっしょうがない

ゆとり教育の弊害だろうか？
俗にいうゲーム脳ということか？

…ふう、こんなろくでもないことは記憶として多少は残ってるんだな

不思議なもんだ
さて、僕の脳内語りはこころへんにしておくか

「おお…砂糖みつけ。…ってカラかよ」

砂糖が入っているはずの瓶を手にして面倒くさを吐露した
そういえば昨夜に飲んだ時に切らしてたんだっけ

こんな風に独り言をつぶやいて脳内会話を嗜んでいるのも目覚めてからの気がする

ここまで寂しい奴じゃなかったはずだと思いたい

「しょうがない。砂糖を仕入れに行ってくるか…」

「外は冷えるぞ。厚着をしていけ。お前は人間なんだから風邪というものを患うやもしれん。」

「ああ…そうだったな。この部屋も少し肌寒いくらいだな。ありがとう」

僕は忠告に従い、だらしのないアニメキャラのプリントされたロングTシャツの上から厚手のコートを羽織る

残念ながらこのTシャツは僕の趣味ではないし、日常から着用しているわけではない

この非日常のなかでは仕方がなく着ているだけなのだ

僕は日常的に着ている人間をバカにしているわけではない

ただ、センスの違いを理解していただきたい

こういう趣味があるわけではない

やむをえないということだ

寒空の中にいかなければならない憂鬱を抱えて僕はドアノブに手をかける

「ああ…ついでにアイツを迎えに行ってくれ。そろそろ仕事が終わっているはずだ。」

僕はドキリとした

アイツという単語に異様な恐怖感を覚えた

「…別にアイツは…俺が迎えに行かなくてもいいだろ。勝手に帰ってくるさ」

「そんなことはないぞ。アイツはお前が行けば喜ぶだろうさ。」

…喜ぶ？

何を言ってるんだ

喜怒哀楽でいうところの、怒りという感情の高ぶりを抑えられそうになかった。

曲がりなりにも喜びという感情はおかしい

間違っ
てやがる…

「…くそっ！！！！ざけんなっ！！！！」

僕は勢いよくドアを閉めて外に飛び出した

それほどまでにアイツは俺の神経を逆なでする

割り切れるということはすごく大事である

自分の感情に対して理由付けができる

そうすることで安定を保とうとするのが人間だ

しかし理屈は分かっている

どんなに理解をしても

それすらも飛び越えてしまうようなモノが感情だ

人間は愚かだ

合理的じゃない

そして

間違いなく僕も愚かな人間の一人だ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8897y/>

この一時を目に焼き付けて

2011年11月29日20時52分発行